

令和二年度入学試験問題

国語

(教員養成課程)

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまでは、この問題冊子を開かないこと。
- 2 問題冊子は表紙を含めて七ページです。
- 3 解答用紙は五枚、下書き用紙は二枚あります。
- 4 解答は指定された解答欄に記入すること。
- 5 受験番号は解答用紙の指定欄に横書きで記入すること。
- 6 解答は縦書きとし、指定された字数にまとめること。句読点や括弧記号等も、一字分とします。
- 7 解答用紙のみを提出し、問題冊子・下書き用紙は試験終了後、持ち帰ること。なお、いかなる理由があっても、解答用紙以外(下書き用紙など)は受理しません。
- 8 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等により交換を必要とする場合は、手を挙げて監督者に知らせること。

問題 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、

は、和歌の現代語訳を全部、または一部省いた箇所です。

和歌における見立ては、「視覚的な印象を中心とする知覚上の類似に基づいて、実在する事物Aを非実在の事物Bと見なすレトリックである」と定義することができる。この定義について、もう少し説明を加えておこう。

見立ては比喩の一種であるが、(AとBの見立て)におけるAとBの双方が、目で見、手で触れることのできる「物」であることを特徴とする。前述した是則の「朝ぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里に降れる白雪」の場合、実在の事物Aにあたるのが「雪」、非実在の事物Bにあたるのが「月」であった。私たちのない「母の愛情」を「海」にたとえるといった表現は、見立ての範疇には入らない。つまり和歌における見立ては、現代修辞学でいうところのメタファー(隠喩)に比べれば、及ぶ範囲の限られたレトリックである。おのずから見立ては、心情を歌う恋歌よりも、折々の景物を捉える四季歌の中に多く見受けられる。見立ては「景物の組合せ」と並んで、『古今集』四季歌を特徴づける表現の(型)の一つなのである。

また見立ての多くは視覚的な類似によってAとBとを結びつけるが、聴覚的な類似による例——「松風を琴の音と聴く」「落葉の散る音を時雨と聴く」——「雁の声を槽の音と聴く」など——も少数ながら存在している。定義の中で「視覚的な印象を中心とする知覚上の類似に基づいて」というやや回りくどい言い方をしているのは、そのためである。

「見立て」の歌は『古今集』の中に百首あまり見られるが、それらは性格の異なる二つのパターンに大別することができる。

I類(自然と自然の見立て)

II類(自然と人事の見立て)

同じ見立てではあるが、この二つにはさまざまな点で相違が認められる。

まず『古今集』に見られるI類(自然と自然の見立て)には、次のようなものがある。

雪↓花 花↓雪 花↓波 波↓花 雲↓花 雪↓月 空↓海 菊↓星 白菊↓波
滝↓雲 鶴↓波……

※「花」には梅、桜、春の「花」万般が含まれる。

I類は、「雪・花・波・月・雲」などごく限られた範囲の、白い印象をカンキする景物を中心として行なわれている。王朝の歌人たちは「白」という色に特

別な美を見いだしていたらしい。そして多くの場合「A↓B」「B↓A」の双方向の見立てが成り立つ、つまりAとBに互換性があるという特徴が見られる。I類は、選り抜かれた「白く美しい物」のあいだで閉じている。

I類の中で最も歌数が多いのは、雪から花、あるいは花から雪への〈雪と花の見立て〉である。

④ 1 み吉野の山辺に咲ける桜花雪かとのみぞあやまたれける(春上・六〇・紀友則)

2 雪とのみ降るだにあるを桜花いかに散れとか風の吹くらむ(春下・八六・凡河内躬恒)

桜の花は、ただでさえ雪のようにしきりに散っているのに、さらにどのよう散れと言って、風が吹くのだろうか。

⑤ 3 春立てば花とや見らむ白雪のかかれる枝に鶯の鳴く(春上・六・素性法師)

白雪が降りかかっている枝に、鶯が鳴いている。

1は、吉野山に咲き誇る「桜」を遠望して「雪」に見立てた歌で「AはBかとのみぞあやまたれける」という、「見立てる」ことをタンテキに表わす構文を持っている。「吉野山」は雪と桜の名所として知られる歌枕。見立てによって、遠山の桜が真っ白な雪景色に変じている。2は、散る「桜」を降る「雪」に見立てるもの。ただでさえ雪のように散り急ぐ桜なのに、さらに風までが吹いて、ますます散ってしまうことが嘆かれている。この歌の中では、〈雪と花の見立て〉と〈花を散らす風〉という二つの〈型〉が結びついている。私たちも耳にする「桜吹雪」という言葉は、こうした『古今集』歌をルーツとしている。3は「雪の木に降りかかれるをよめる」という詞書を持つ歌。鶯は「雪」を「花」だと見誤っているのかしら？ という疑問を通して、一進一退の春が捉えられている。この歌では、見立ての主体は、春を待つ鶯なのである。〈雪と花の見立て〉という〈型〉によりつつ、多様な表現が試みられていることが知られよう。

II類(自然と人事の見立て)は、自然界の景物を人が作り出した品々に見立てるものである。『古今集』には次のような例が見られる。

紅葉↓錦 (川を流れる)紅葉↓舟 紅葉↓幣ぬぎ 柳↓糸 柳桜↓錦 薄↓袖すすき 霞↓衣
露↓玉 露霜↓経緯たてぬき 時雨↓経緯 雁声↓櫓声 滝↓糸 滝↓布 波↓玉……

Ⅱ類の方がⅠ類よりも種類が多いこと、B「非実在の事物」は「錦・糸・布・袖・衣・経緯」など衣服に関わる物を中心としていること、そして、基本的には自然から人事への一方向のみで行なわれること、がわかる。

Ⅱ類の代表といえるのは（紅葉と錦の見立て）である。「錦」は金銀さまざまな色の絹糸を縦横に織り上げた豪華な織物で、大変な貴重品であった。（紅葉と錦の見立て）は、自然の驚異的な色彩美を、人が作り上げた最高級の品にたとえる表現である。

4 霜のたて露のぬきこそ弱からし山の錦の織ればかつ散る（秋下・二九一・藤原関雄）

霜の縦糸、露の横糸が弱いらしい。山を彩る紅葉の錦は、織り上げるそばから散っていつてしまふ。

5 ⑥ 神奈備の三室の山を秋行けば錦たちきる心地こそすれ（秋下・二九六・壬生忠岑）

神奈備の三室山を秋に越えて行くと、私の身にも紅葉が散りかかって、

4は、秋の山に露や霜が降りて木々が色づいていくさまを、霜の「経（縦糸）」と露の「緯（横糸）」によって豪華な「錦」を織る、と見なしている。山の錦と見えているのは実は紅葉であるから、「織ればかつ散る」——織り上げる片端から散り散りになってしまうのである。この歌の場合、（紅葉と錦の見立て）を要として、「秋山の木々が紅葉する」という自然現象全体が、「錦を織る」という人間の営為に置き換えられている。5の「神奈備の三室の山」は、奈良県生駒郡の龍田川流域の山かと考えられている。古典和歌において、龍田川の一帯は紅葉の名所であった。秋も深まった頃に、しんと静まりかえった三室山を越えていくと、私の身にも色とりどりの紅葉が散りかかって、まるで豪華な錦を身にまとっているような気がする、という。秋の山道は心細いが、華麗な衣を身につけているのだと思えば、ほんの少し心も華やぐかもしれない。

Ⅱ類の歌をもう一例見てみよう。⑦ 僧正遍昭が詠んだ柳の歌である。柳は春先にしなやかな枝が青々と芽吹く様子が印象的であることから、春の景物とされた。この歌では、みずみずしい枝に露が降りて光彩を添えている。

6 浅緑糸よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か（春上・二七・僧正遍昭）

浅緑色の糸を縫って懸けて、白露の宝玉を貫いている春の柳であることだ。

6では、柳の枝が糸に見立てられ——「柳糸」という漢語がある——また白露が宝玉に見立てられている。Ⅱ類の見立て二つが並存しているのである。ま

た「柳が糸によって露を玉として貫いている」という文脈が認められるので、見立てに伴って、「柳」が意志ある者のように擬人化されていることもわかる。このようにⅡ類（自然と人事の見立て）は、しばしば擬人法とも結びつく性質を持っている。擬人法すなわち「人の営みに引き寄せて捉える」ことは、万物を理解しようとするときの基本的な枠組みの一つである。Ⅱ類は、より基本的な発想法ともツウテイしているのである。

俳諧の見立てが、一回ごとのAとBの斬新な組合せを真骨頂とするのに対して、和歌の見立ては、Ⅰ類にせよⅡ類にせよ、いくつもの固定した（型）の中に収まってしまふ。『古今集』の歌人たちは、^⑧「雪と花の見立て」あるいは（紅葉と錦の見立て）といった（型）を共有した上で、さまざまな工夫を凝らし、ことばを精緻に組立てて、多彩な表現を生み出すのである。

ところで、見立てによって結びつけられるAとBは、本当に似ているのだろうか。たとえば（桜と雪の見立て）の場合。「桜」は春に地上で咲く植物であり、一方の「雪」は冬に空から降ってくる天象である。この二つは本来まったく異なるのではないか。本当は似ていない二つの物を、「白さ」という印象深いたった一つの類似性を取り出すことによって、半ば強引に結びつけてしまふ、言い換えれば、それ以外の属性はすべて捨象してしまふ。このような潔いほどの取捨選択と誇張とが、「見立て」というレトリックの命である。

実のところ「桜」は「雪」よりも「梅」に似ているが、「桜」を「梅」に見立てたところで、あまり面白くない。本当は似ていない「桜」と「雪」を結びつけることから、二つに共通する「真っ白な美しさ」が、あらためて認識されるのである。「見立てる」ことによって、それまで何気なく見ていたものの中から、思いがけない本質が鮮やかに立ち現われてくる。見立てというレトリックには、和歌の場合のようにAとBとが固定していてもなお、発見的思惟と驚きが伴っている。

「見立てる」ことによって何が起きるのだろうか。前述の1「み吉野の山辺に咲ける桜花雪かとのみぞあやまたれける」では、「桜」を「雪」に見立てたこと^eによって、「花ざかりの吉野山」が、真冬の「雪景色」に、一瞬にしてへんぼうしていた。4「霜のたて露のぬきこそ弱からし山の紅葉の織ればかつ散る」では、自然の精妙なまでの色彩変化が、人間の最先端の技術に置き換えられていた。見立ての力によって、それまで見ていた風景が一変し、世界が一転する。見立てとは新しい認識の提示なのである。^⑨『古今集』歌人は、見立ての力によって、この世界を再構築する。

（鈴木宏子『古今和歌集』の創造力、NHK出版、二〇一八年刊による。一部改変。）

注 * 1 幣……神に祈るときにささげる供え物。麻・木綿・紙などで作った。

問一 二重傍線部 a) e のカタカナは漢字にし、漢字はその訓読みをひらがなで書きなさい。(二〇点)

問二 傍線部①に「見立ては、心情を歌う恋歌よりも、折々の景物を捉える四季歌の中に多く見受けられる」とありますが、それはなぜですか。恋歌と四季歌の違いをふまえて、三〇字以上四〇字以内で説明しなさい。(一〇点)

問三 傍線部②に「雁の声を櫓の音と聴く」とありますが、この見立ての元になった白居易「河亭晴望」(『白氏文集』)について、次の問いに答えなさい。なお、この詩は、白居易が水郷として有名な蘇州の役人だった、五十五才の時の作です。この詩には、九月九日重陽節の前日、川辺の亭から見た雨上がりの風景が描かれています。「斂」は収まる、「銷」は消える、「遥」は、はるかという意味です。「櫓」は船をこぎ進める道具です。(三〇点)

風転雲頭斂、煙銷水面開。

晴虹橋影出、秋雁櫓声来。

郡静官初罷、郷遥信未廻。

明朝是重九、誰勸菊花盃。

- (一) この詩の詩型を書きなさい。
- (二) この詩の韻字をすべて抜き出しなさい。
- (三) 六句目を書き下し文にしなさい。
- (四) 八句目を現代語に訳しなさい。

問四 傍線部③に「視覚的な印象を中心とする知覚上の類似に基づいて」というやや回りくどい言い方をしている」とありますが、それはなぜですか。「見立て」という語を用いながら、五〇字以上七〇字以内で説明しなさい。(二〇点)

問五 傍線部④の和歌「み吉野の山辺に咲ける桜花雪かとのみぞあやまたれける」を、現代語に訳しなさい。(一〇点)

問六 傍線部⑤の「春立てば」における「ば」について、次の例にならって、文法的に説明しなさい。(五点)

(例) 花とや見らん 疑問を表す係助詞

問七 傍線部⑥の和歌「神奈備の三室の山を秋行けば錦たちきる心地こそすれ」について、見立て以外の和歌の表現技法を説明しなさい。(二〇点)

問八 傍線部⑦の「僧正遍昭」について、次の語をすべて用いて、五〇字以上六〇字以内で説明しなさい。(二五点)

在原業平 紀貫之 仮名序

問九 傍線部⑧に「雪と花の見立て」あるいは「紅葉と錦の見立て」といった「型」を共有した上で、さまざまな工夫を凝らし、ことばを精緻に組立てて、多彩な表現を生み出すのである」とありますが、6の和歌における「型」と「工夫」について、五〇字以上七〇字以内で説明しなさい。(二〇点)

問十 傍線部⑨「古今集」歌人は、見立ての力によって、この世界を再構築する」とありますが、これはどういう意味ですか。本文でこれに関して述べていることを、次の二語を用いながら、八〇字以上九〇字以内でまとめなさい。(二〇点)

本質 認識

問十一 本文で扱われている事物以外のものを取り上げて、自然と人事の「見立て」を行いなさい。何を何に見立てるのか、両者の似ていない点および両者の類似性について言及しながら、取り上げた事物の本質について、一五〇字以上一七〇字以内で述べなさい。(四〇点)